

スーパーサイエンスハイスクール・福島高校の皆さんを迎えて

追手門学院大学笑学研究所所長、国際教養学部教授 高垣 伸博

2018年5月28日 笑学研究所に1通のメールが届いた。

「突然のメールにて失礼いたします。私は福島県立福島高等学校2年の〇〇〇〇と申します。私の高校はSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受け、その活動として様々なテーマに分かれて課題研究をしています。私たちの班は「笑い」をキーワードにし・・・（中略）・・・つきましては、10月24日、25日に研修旅行で大阪方面に行くため、先生に空いているお時間があれば、笑学研究所で直接笑いについての研修をさせていただきたいと思っております。お忙しいところ申し訳ございませんが、ご返事いただけると幸いです。」という内容であった。

何度かのメールのやり取りを経て「皆さんの研究課題・研究内容を発表していただいたうえで、疑問等を一緒に考えてゆく勉強会にしましょう」ということになった。

果たして、3班20名が10月24日、25日の両日に分かれて笑学研究所に訪れた。

そもそもスーパーサイエンスハイスクールとは何ぞや。ご存知の方も多いだろうが、文部科学省のホームページには「文部科学省では、将来の国際的な科学技術関係人材を育成するため、先進的な理数教育を実施する高等学校等を『スーパーサイエンスハイスクール』として指定し、学習指導要領によらないカリキュラムの開発・実践や課題研究の推進、観察・実験等を通じた体験的・問題解決的な学習等を平成14年度より支援しています。」と記載されている。

その指定校である福島高等学校の面々が研修先として笑学研究所を見つけ出したのである。

課題研究には多くのカテゴリーが設定されており、その中のひとつ「人間とエネルギー」、さらにキーワードの「笑い」を選択した生徒が3つのグループに分かれて研究に取り組み、学年末の3月に校内で成果を発表するという運びだそうである。

ここに、各班の掲げた課題研究のテーマと課題、また勉強会後の研修会報告を掲載することで、勉強会報告とさせていただきます。

2018年10月24日（水）13:00～14:30 於：高垣研究室（5706）

A・B班 12名 参加所員：浦光博 高垣伸博 事務：中川啓子



A 班 テーマ 「グローバル化が進む中で、笑いをどうとらえるか？」

「課題発表」

- ・外国人と日本人の笑いのとらえ方の違いによるすれ違い。
インバウンドが多くなると外国人とのコミュニケーションが増える。その際の文化の違いによる笑いのとらえ方は？
- ・日本の中でも 東京・大阪の笑いの違いがある。
東京は形式的な笑が多く（型にはまっている）社会風刺が混じっており、自分も周りも傷つけない笑いであると考え。自分をさらけ出さず笑いで自分を守る。しかし大阪は笑いに貪欲で厳しく、力社会の中で人間関係を築くのに笑いは必要不可欠である。昔から商人文化で陽気である。
中国・アメリカ・イギリス・オーストラリアの笑いの特徴を調べた。

「研修報告」

カテゴリー 人間のエネルギー

キーワード 笑い

班名 Laugh and peace

班員 野間悠佑、三浦綺華、渡部水彩、吉岡佑、西塚海翔、渡部真子

1 研修先

追手門学院大学

2 研修先の選定理由

設立して間もないが、笑学研究所があるということで、笑いについての意見交換や、質疑応答を通して笑いについての理解を深めるとともに、様々な考え方をできるようにする。

3 研修先でわかったこと・学んだこと・調べたこと・得られた視点

不一致解消する際に、笑いというものが発生する。ずれを解消するためには、相手を理解することが必要。理解すればするほど、面白くなる。笑いは、相手に敵意がないことを示し、コミュニケーションを円滑にするための一つのツールである。

4 課題研究とのつながり

外国人とのコミュニケーションを円滑にするために笑いをを使う。笑いのとらえ方は国・地域によって違うため、相手のことを理解することが必要である。

5 感想

野間悠佑 おかしいから笑うか、笑うからおかしいのか、その考え方に感動した。

三浦綺華 笑いについて興味深い話を聞くことができ、これからの研究に役立てていきたい。

渡部水彩 動作的にとらえがちだったが、感情の一種であるという新しい定義を進言され、イメージがより明確になった。テーマの根本をみなおすことができた。



吉岡佑 年代によっても、笑いに差があるということが分かった。

西塚海翔 不一致解消論という考え方が学べて、さらに深めていきたい。

渡部真子 有意義な時間を過ごすことができた。

B 班 テーマ「笑いについて」パワーポイントにて発表

「課題発表」

- ・年代の違う人とのコミュニケーションがうまくいかない。
年代ごとに笑いのツボが違うから情報共有のみのコミュニケーションになる。
よいコミュニケーションには感情共有が必要であり、それが笑いだと考える。
年代によって経験、知識などが違うので、年代の差が生まれる。
高齢になるほど好みははっきり分かれてくる。
- ・年代による笑いのツボがあるのか。

「研修報告」

カテゴリー 人間のエネルギー

キーワード 笑い

班名 一笑懸命

班員 伊藤のぞみ 山崎紗佳 佐藤愛美 林帆夏 吉田空右 長谷川笑花 佐藤桃子

1 研修先

10月24日、追手門学院大学笑学研究所を訪問し、高垣伸博先生、浦光博先生と意見交換会を行いました。

2 研修先の選定理由

私たちは笑いについて研究しており、追手門大学の笑学研究所では笑いについて研究をしているため、私たちの研究の方向性と一致していたから。

3 研修先でわかったこと・学んだこと・調べたこと・得られた視点

立場の違いなどから生まれる相手間との「ズレ」が解消した時に緊張が緩和され、無意識のうちに安心することから生まれる笑い「不一致解消理論」、おかしいから笑うのではなく、笑うからおかしいという理論、女子の笑いは仲間意識が、男子は必要性がある場面（仕事上）で笑うとされているということが分かった。

4 課題研究とのつながり

ズレの解消時に笑いが生まれるということから、年代間の認識や知識のズレを調べ、またズレの解消の方法を調べればよいことが分かった。

また、男女の笑いの違いが明確になったことから年代間だけでなく男女間の笑いのズレもわけて考える必要があることが分かった。



5 感想

お話を聞く中で特に印象が残ったのは「おかしいから笑うのではなく笑うからおかしい」ということです。無理にでも笑顔を作ることによって自然とおかしいという感情が湧き上がってくるということに驚きました。(愛美)

「物事がおかしいから笑うのではなく、笑うからおかしいと感じる」という考え方には衝撃を受けました。おかしさは後からやってくるという普通とは違った考えを聞き、視野を広げることができました。私たちの班は、過ごしてきた環境、今までの経験や知識の差によって、物事の受け止め方や感じ方が違うため、年代ごとに笑いの傾向が変わってくるという仮説を立てていましたが、笑学研究所の方の研究と重なる部分があり、より理解を深めることができました。また、研究所の方から「笑いのツボは個人で変わってくるため、笑いの傾向とツボは分けたほうが良い」とアドバイスをいただきました。それを踏まえたうえで今後の展開をしていきたいと思います。(帆夏)

今回笑学研究所の所長の方々と意見交換会をして、新しい視点を得られ、私たちの研究に対するアドバイスもいただきました。様々な意見の中でも特に印象に残ったのは「物事がおかしいから笑うのではなく、笑うからおかしい」ということです。私は逆の考え方もあるのだと分かり、ハッとさせられました。(桃子)

「不一致解消理論」や「感情が出るからその事柄がどのような物かわかる」など、考えもつかなかった新しい理論に感動しました。この研修で視野が広がったと思います。鉛筆をくわえて本を読むとさらに面白く感じるというのもおもしろかったです。(のぞみ)

不一致解消理論や、笑うからおかしいという笑いの理論を知ることができてよかったです。また、年代が違ってても笑いをユーモアな心を持つことの重要性にも気づかされました。(紗佳)

10月25日(木) 13:00~14:30 於: 高垣研究室(5706)

C班 7名 参加所員: 木村英樹 高垣伸博 浦 広瀬光博 広瀬頼子 事務: 中川啓子

C班 テーマ「年を重ねると笑う機会が減るというのが問題ではないか」

気になるCMがある。「大人グリコ」の中で「子供は1日400回笑い、大人は1日15回になる」と謳っている。これがきっかけになった。

「課題発表」

- ・笑いは増やせばいいのか。
- ・現代の若者の笑いは「いじる」「いじられる」「攻撃的な笑い」面白ければ何でもOKなのか。
- ・仲間意識による閉塞感 ここで笑わなければいけないという思い。それには、ただ笑いを増やすだけではなく、適切な笑いが必要。



笑う側と笑われる側が互いに良い気分になることが適切な笑いだと考える。

そのためには共通の話題や趣味を持ち関係を保つ。そのためには夢・目標を持ち、関係性を保てる人を探す必要があると考える。

「研修報告」

カテゴリー 人間のエネルギー

キーワード 笑い

班名 きりのかなた

班員 石塚凱晴、松元康志、高橋孝太、菅野佑志、菅野航平、吉田可奈、海老名帆夏

1 研修先

追手門学院大学

2 研修先の選定理由

コミュニケーションとしての笑いについて専門的に研究しているから。

3 研修先でわかったこと・学んだこと・調べたこと・得られた視点

笑いとは健康はイコールで結ぶことのできる関係ではなく、心身ともに健康であることによって効果的なものが生まれ、そこで初めて笑いという動作が発生する。

また、日本国内で「笑い」が異なっている。江戸時代の江戸にいる武士は、「笑う」という行為を下品だと認識していた。反対に、商売が盛んにおこなわれていた関西では、なるべく安く買うために「笑い」を通じて、コミュニケーションをとっていた。商人にとって「笑い」とは商売と隣接したものだった。これらが現代に反映しているという考えがある。また、関東では最近SNSやメールなどのやり取りの中で冗談じみた発言をするときには（笑）や「w」語尾につくことが多いが、関西では冗談じみたことでも（笑）や「w」が語尾につくことは少ない、という違いもある。

おもしろいと感じるのは「ユーモアの心」であり、同時に人を寄せせないバリアを作ってしまう。そのバリア内でさらに「笑い」による絆が生まれ、さらに孤立状態になってしまう。

4 課題研究とのつながり

自分たちはこれまで「良い関係」を意識して研究を進めてきた。自分の好きなこと、目標、夢などを明らかにすることで、ともに努力できそうな人などといった良い関係を保てそうな人を見つけようとするべきだと考えてきた。しかし討論の中で、良い関係を意識しすぎると、そのような人ばかりにこだわりを持ってしまうことになり、一部の人を排除することになりかねない、というご指摘を頂いた。このことについてもう一度考え直し、どのようにしてバランスを保っていくかを改めて結論付けることで、これからの課題研究につなげていきたい。



5 感想

様々な学部の方にお越しいただき、あらゆる視点からより深く学ぶことができた。新しい「笑い」の考えを知り、衝撃を受けることも多くあった。(菅野佑志)

地域別や国ごとの「笑い」に対する考え方や、心理学的な面での「笑い」の効果のお話も伺い新しい学びが多かった。また、関西と関東におけるメールのやり取りでの違いのような身近なお話もうかがい、自分の立場に当てはめて考えることもできた。(石塚凱晴)

笑い与健康というテーマについて深く話し合うことができ、新しい視点を得ることもできたので良かった。(松元康志)

笑いに関する幅広いお話を伺うだけではなく、私たちが行う研究の進め方についての適切なアドバイスもいただき、今後の参考にすることができた。(海老名帆夏)

歴史を踏まえた笑いの地域性のお話や、紙一重な関係を持っているポジティブな笑いとはネガティブな笑いについての話が印象的だった。(高橋孝太)

笑い与健康には直接的ではなく間接的なつながりがあることなど、自分たちの仮説とは違ったことを多く学ぶことができた。また、自分たちで発表をして質問を受けることで、考えを深めることもできた。(吉田可奈)

笑いについていろいろな方面から考えを聞くことができた。関西と関東では笑いの違いがあると改めて知ることができて面白く感じた。(菅野航平)

※研修報告は原文のまま

今回の勉強会はわれわれ笑学研究所にとっても良い経験となった。なによりも彼ら彼女らが「笑い」というテーマに真摯に向き合い、その重要性、必要性を感じているということが素晴らしく、本学の学生もこうあってほしいものだとつくづく実感した2日間であった。



福島高校のグループ発表
(A・B班 2018. 10. 24)



笑学研究所所員との意見交換
(C班 2018. 10. 25)